

chapter.05

諸版対照テキストと註釈対象語句索引の 作成をどうすすめるか

—— *Samantapāsādikā* の研究基盤を整備する

青野道彦

1. はじめに

Samantapāsādikā は上座部仏教の教団規則および比丘・比丘尼たちの生活規範の集成である戒律聖典 *Vinayaṭīkā* (律蔵) の註釈文献である。制作者は5世紀前半にスリランカで活躍したブッダゴサであり、序文によれば、古註釈書や古師たちの見解を踏まえつつ、戒律に関する決定説 (vinicchaya) を示すために本書を制作したという¹⁾。

この註釈文献は本来的には比丘・比丘尼が上座部大寺派の正統な戒律理解を学び、戒律を実生活の中で現実化するための具体的方法を知るための典籍であるが、研究者が *Vinayaṭīkā* の内容を考察する上でも貴重な資料である。まず、その語句解説が *Vinayaṭīkā* の語句を理解する上で有用である。*Samantapāsādikā* は *Vinayaṭīkā* に現れる語句を逐語的に引用し、それを順次に解説していく。その解説は *Samantapāsādikā* の制作者がどのようなテキストに向き合っていたのか明かし、その当時の *Vinayaṭīkā* の読みを証言する役割を担うとともに、難解な語句の意味について有益な情報を提供してくれる。次に、*Samantapāsādikā* は *Vinayaṭīkā* では明確に説明されない規定の具体的内容を知る上で有用である。われわれが戒律の詳細について理解しようとする際、大きな障害となるものに、*Vinayaṭīkā* の読み手として当然持っておくべき前提知識の欠如がある。意図された読み手が知っていて当たり前の事柄について、

Vinayaṭīka の編纂者たちは自明なこととして説明を省くのは当然であり、そのような空白のままとなっている部分の言語化を *Samantapāsādikā* は試みている。それは *Vinayaṭīka* の編纂者たちと時代・地域などを大きく異にするわれわれにとって参考になるものである。

現在、われわれはこの註釈文献に二つの仕方でアクセスしている。一つはこれまでと同様に紙媒体を用いる仕方であり、もう一つはデジタル・テキストを用いる仕方である。パーリ語は印欧語に属するためローマ字による表記が可能であり、漢訳仏典のように異体字の問題がない。そのため、デジタル・テキストの作成が比較的容易であり、複数のバージョンのデジタル・テキストがインターネット上で一般の利用に供されている。*Samantapāsādikā* についてもデジタル・テキストが諸バージョンについて存在しており、それを参照することが研究者のあいだで一般化している。

筆者は、目下、これらのデジタル・テキストを用いて、*Samantapāsādikā* の研究基盤を整備するために二つの作業に取り組んでいる。一つは諸バージョン対照テキストの作成であり、もう一つは註釈対象語句索引の作成である。前者は諸バージョンの異読^{いどく}確認の簡便化、および、将来的に *Samantapāsādikā* の改訂版テキストを制作するための土台作りを目指している。後者は膨大な分量の *Samantapāsādikā* から当該の語句解説を簡便に見つけ出すためのツールの構築を目指している。これらの作成には XML を用い、人文学資料を構造化する際のデファクトスタンダードとなっている TEI P5 ガイドラインに準拠してマークアップを行っている。以下、この TEI P5 ガイドラインに示されるタグ・セットをどのように応用し、いかなるプロセスで諸バージョン対照テキストと註釈対象語句索引の作成を進めているのか少しく説明したい。あわせて、*Vinayaṭīka* と *Samantapāsādikā* のデジタル・テキストに関する将来的な構想について述べたい²。

2. 諸バージョン対照テキストの作成

Samantapāsādikā のバージョンは、主要なものだけでも、タイ王室版、Pali Text Society (PTS) 版、Simon Hewavitarne Bequest (SHB) 版、ビルマ版の四種がある。

これらのうち一応の標準版は Pali Text Society 版である。しかし、これには誤字や脱字、文字列の区切り方の間違いなどが散見される。また、第3巻以降は、第1～2巻で用いられた諸写本・版本が利用されず、“Bp”という略号で示される古ビルマ版の Pyi Gyi Mundyne Pitaka Press 版と“Ssp”という略号で示されるタイ王室版のみの校合により制作されている。PTS 版を底本として用いる場合には、ほかの版本、特に SHB 版、ビルマ版を参照して、誤字などを修正するとともに、異読を確認する必要がある。

現在、この対照作業は研究者が各人で行っているが、それは紙媒体およびデジタル・テキストの諸版本を目視で参照することによってであろう。あるいは、デジタル・テキスト同士を、diff (https://diff.jp/) などのテキスト比較ツールを用いて対照することによってであろう。

ここで、現在の各版本のデジタル・テキストの状況を示すと、【表1】の通りである。

表1 各版本のデジタル・テキスト

PTS 版	テキスト・ファイル	http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.htm で公開
SHB 版	バイナリ・ファイル	個人蔵
タイ版	テキスト・ファイル	http://budsir.mahidol.ac.th ほかで公開
ビルマ版	テキスト・ファイル	http://www.tipitaka.org/chattha ほかで公開

PTS 版、タイ版、ビルマ版についてはデジタル・テキストがインターネット上で公開されており、一般の利用に供されている。これらはテキスト・ファイル化されており、テキスト比較ツールによる異読の確認が可能である。ただし、SHB 版がテキスト・ファイル化されていないため、依然として目視での対照が必要である。また、PTS 版、タイ版、ビルマ版については誤入力の可能性が否定できないので、最終的には紙媒体の確認が必要である³。

このような状況を踏まえて、筆者が取り組んでいるのが諸版本対照テキストの作成である。現在、その手初めてとして、SHB 版のテキスト・ファイル化を進めている。これまでに終了したのは PTS 版 *Samantapāsādikā* の 517～684 頁に相当する部分に限られるが、今後数年以内に全体についてテキスト・ファイル化を進める予定である。その後には、ほかの版本の異読の取り込みも予定

している。これらの作業は底本の PTS 版に諸版本の異読をマークアップすることで行う。【表 2】にそのためのタグ・セットを提示する。

表 2 各版本の異読の表記方法

PTS 版	底本	<witness xml:id= “E” >PTS</witness>
SHB 版	<rdg wit= “C” > </rdg>	<witness xml:id= “C” >SHB</witness>
タイ版	<rdg wit= “S” > </rdg>	<witness xml:id= “S” >Siamese</witness>
ビルマ版	<rdg wit= “B” > </rdg>	<witness xml:id= “B” >Burmese </witness>

このように諸版本の異読を一つのテキスト・ファイルに集約するならば、異読の確認がこれまでと比較にならないほど容易なものとなるだろう。また、将来的に新たな版本を制作する上でのプラットフォームにもなろう。*Samantapāsādikā* と同じく校訂作業が不完全であった旧 PTS 版 *Kaṅkhāvitaraṇī* (1956 年出版、Dorothy Maskell 校訂) は、2003 年に K. R. Norman と W. Pruitt により改訂版が出版された。その際に主たる校合の対象として用いられたのがタイ版、ビルマ版、SHB 版である。これらの版本を集約した諸版本対照テキストは *Samantapāsādikā* の改訂版を作成する際に土台となるはずである。

3. 註釈対象語句索引の作成

Samantapāsādikā は apubbapadavaṇṇanā (初出の語句の註釈) という註釈指針を立て、原則として初出の語句のみを註釈し、一度説明した語句については再度の説明を省略する。このため、*Samantapāsādikā* の註釈は先に進むにつれて分量が減り、前半部 (経分別) に対する註釈が豊富であるのに対して、後半部 (犍度部^{けんどぶ}と附随) に対する註釈は少ない。

この apubbapadavaṇṇanā という註釈指針は *Samantapāsādikā* において三度示され、以下に当該箇所を引用する。

〈僧残に関する註釈部分の冒頭偈〉

yaṃ pārājikakaṇḍassa saṅgītaṃ samanantaraṃ,

tassa terasakassāyaṃ apubbapadavaṇṇanā. (*Samantapāsādikā* 517.5–6)

以下は波羅夷^{はらゐ}の箇所^{ごうじょ}の直後に合誦された
十三（＝僧残）に関する初出の語句の註釈である。

〈尼薩耆波逸提^{にさぎはいつだい}に関する註釈部分の冒頭偈〉

tiṃsa nissaggiyā dhammā ye vuttā samitāvinā,
tesaṃ dāni karissāma apubbapadavaṇṇanam. (*Samantapāsādikā* 636.2–3)
三十条の尼薩耆〔波逸提〕の規則が寂靜者^{じゃくじょうしゃ}により述べられたが、
今、それらについての初出の語句の註釈を行おう。

〈比丘尼分別に関する註釈部分の冒頭偈〉

yo bhikkhūnaṃ vibhaṅgassa saṅgahīto anantaram
bhikkhunīnaṃ vibhaṅgassa tassa saṃvaṇṇanākkamo.
patto yato tato tassa apubbapadavaṇṇanam
kātuṃ pārājike tāva hoti saṃvaṇṇanā ayam. (*Samantapāsādikā* 900.3–6)
比丘分別の直後に比丘尼分別がまとめられたが、
それを註釈する段となったので、
その初出の語句の註釈を行うために、
先ず波羅夷に関して以下の註釈が出来たのである。

apubbapadavaṇṇanā という註釈指針は上記引用で言われる三カ所だけでのみ通用するのではなく、それ以外の箇所も含めて *Samantapāsādikā* 全般に適用されるものである。例えば、波羅夷第2条に関する註釈部分の冒頭偈では、apubbapadavaṇṇanā という語は用いられないが、以下のように初出の語句についてのみ註釈することが明言されている。

dutiyam adutiyena yaṃ jinena pakāsitaṃ, pārājikaṃ tassa 'dāni patto
saṃvaṇṇanāk-kamo, yasmā tasmā suviññeyyaṃ yaṃ pubbe ca pakāsitaṃ, taṃ
sabbaṃ vajjayitvāssa hoti saṃvaṇṇanā ayam. (*Samantapāsādikā* 285.6–9)
比類なきジナにより波羅夷第2条が明らかにされたが、今、それを註釈する段となったので、明白なものと既に説明したものとを全て除き、これ（＝

波羅夷第2条)に関する以下の註釈が出来たのである。

この註釈指針にはテキストの分量を縮減する効果があり、伝承の負荷を軽減するのに役立っているが、読み手には少なからぬ不便をもたらす。*Samantapāsādikā* を参照する際、*Vinayaṭīkā* の当該箇所に対する註釈以外に、それ以前の箇所にさかのぼって当該語句に対する註釈を探し出すことが求められるからである。

全文検索が可能な現在、当該箇所を探し出すことは簡単に見えるかもしれないが、必ずしもそうではない。後続箇所に現れる語が前出の語と数・格が同じであるとは限らず、結果として、同じ語でも文字列としては異なっていて検索してもヒットしない場合があるからである。また、語として単独では註釈されず、句として註釈される場合もあるからである。これらが検索を難しくし、目当ての註釈箇所へのアクセスを阻害する要因となる。この阻害要因を除くためには、註釈対象語句索引の作成が求められる。

TEI P5 ガイドラインによると、註釈箇所をマークアップするタグは <gloss> であり、註釈対象をマークアップする代表的なタグは <term> であるとされる。そして、両者を @xml:id と @target により関連付けるべきという。しかし、このマークアップはパーリ語註釈文献にそのまま適用することができない。当該の註釈がほかの要素を含んだりする場合、<gloss> というタグが使えないからである。また、<gloss> は本来的には行間の注解に用いるものであり、原典と切り離されたかたちで存在するバーシュヤ (bhāṣya) 形式の *Samantapāsādikā* には相応しくない。そこで、<gloss> に代わるものとして、<note> というタグを採用し、その用途を厳密化するために @type を付して、<note type= “bhasya” > というタグを用いる。

次に、註釈対象についてであるが、先述の通り、パーリ語註釈文献では原典から句を引用して、そのうちの一部の語句についてのみ註釈を施す場合がある。その場合、その引用は註釈対象ではない語句も含むので、<term> でマークアップするのは正確ではない。そこで、引用を示す <quote> を採用し、引用が原典からのものであることを示すために、<quote type= “basetext” > というタグを用いる。そして、その枠内において註釈対象語を <w> によりマークアップし、

@lemma を用いて、検索用の見出し語を明示する。【図 1】にマークアップ例を提示する。

図 1 註釈対象語のマークアップ例

```
<quote type="basetext" xml:id="A01">
<w lemma="assosi" xml:id="A01-1">Assosi</w>
<w lemma="kho" xml:id="A01-2">kho</w>
<w lemma="veraṇja" xml:id="A01-3">veraṇjo</w>
<w lemma="brāhmaṇa" xml:id="A01-4">brāhmaṇo</w>
</quote>
<note type="bhasya" target="#A01">ti
<note target="#A01-1">assosī ti . . . </note>
<note target="#A01-2">Kho ti padapūraṇamatte . . . </note>
<note target="#A01-3">Veraṇjāyaṃ jāto . . . </note>
<note target="#A01-4">Brahmaṇaṃ aṇafiti . . . </note>
</note>
```

註釈対象が語ではなく句である場合には、<w> ではなく <phr> を用いる。そして、見出しを <orig> というタグで示す。【図 2】にマークアップ例を示す。

図 2 註釈対象句のマークアップ例

```
<quote type="basetext" xml:id="A02">
<phr>
<choice>
<reg>Taṃ kho panā</reg>
<orig>taṃ kho pana</orig>
</choice>
</phr>
</quote>
<note type="bhasya" target="#A02">
ti itthambhūtākhyānathe . . .
</note>
```

このようにマークアップすることで、引用箇所と註釈対象語句の二つを構造化することができ、@lemma で記した見出し語を抽出することにより註釈対象語句索引の作成が可能となる。さらに、その索引を *Samantapāsādikā* の当該箇所とリンクするならば、索引から当該箇所へとジャンプすることが可能となる。

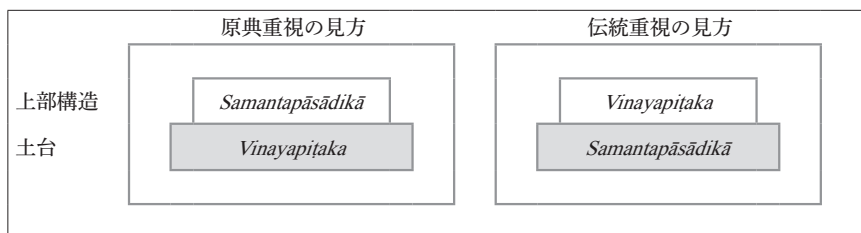
4. 将来の構想——伝統内在的なテキストの再現

以上、諸版本対照テキストおよび註釈対象語句索引を作成する意義、方法、プロセスについて説明してきた。これらの完成は *Samantapāsādikā* の研究基盤の整備につながり、延いては原典である *Vinayaṭṭakā* の解明に役立つだろう。しかし、これらは原典解明のための補助ツールを提供するにとどまっている。ここからさらに進んで、*Vinayaṭṭakā* と *Samantapāsādikā* とが有機的につながった伝統内在的なテキストを再現することを目指すことも可能である。

これまで、註釈文献（アッタカター）は原典（パーリ）を補助する資料として位置づけられてきた。すなわち、原典が土台であり、それにより上部構造である註釈文献は規制されると考えられてきた。このため、原初的な読みの再現が優先され、それにより註釈文献が支持する伝統的な読みは駆逐されてきた。

しかし、伝統的な立場はこれとは異なり、原典の読みが註釈文献によって規定される側面がある⁴。上座部仏教の伝統では、原則として、原典の理解は註釈文献に基づくべきであるとされている⁵。すなわち、註釈文献が原典の読みを規定し、それに基づき原典のテキストが理解されるべきということである。この場合、註釈文献が土台としてあり、原典は上部構造としてある構図となり、原典のテキストは基本的に註釈文献の理解および被引用語句（*pratīka*）の読みと一致することになる【図3】。

図3 原典と註釈文献の関係



このような原典と註釈文献の関係性こそが原典の長年月の伝承を支えてきた原動力であり、この関係性の中にこそ上座部仏教の戒律思想が総体として存在していると言ってよいだろう。上座部仏教の戒律思想を研究する場合、この関

係性こそが研究の中心に据えられるべきであろう。

このような見方に立って研究を推進する際に重要となるのが、原典と註釈文献の関係を可視化することである。これまで、紙媒体では、原典と註釈文献が有機的につながったテキストを構築することは困難であったが、デジタル・テキストを用いるならば、それは可能である。具体的には、次のように原典と註釈文献の被引用語句を @xml:id と @corresp を用いてリンクすることで、それは実現することができる。

まず、*Samantapāsādikā* のマークアップについてであるが、【図 1】と【図 2】を用いて説明すると、<quote> の中に @corresp を追記する必要がある【図 4・5】。

図 4 註釈対象語のマークアップ

```
<quote type="basetext" xml:id="A01" corresp="B01">
<w lemma="assosi" xml:id="A01-1">Assosi</w>
<w lemma="kho" xml:id="A01-2">kho</w>
  <w lemma="veraṇḥja" xml:id="A01-3">veraṇḥjo</w>
  <w lemma="brāhmaṇa" xml:id="A01-4">brāhmaṇo</w>
</quote>
<note target="#A01">ti
<note target="#A01-1">assosī ti . . . . </note>
<note target="#A01-2">Kho ti padapūraṇamatte . . . . </note>
<note target="#A01-3">Veraṇjāyaṃ jāto . . . . </note>
<note target="#A01-4">Brahmaṇaṃ aṇaṇṇi . . . . </note>
</note>
```

図 5 註釈対象句のマークアップ

```
<quote type="basetext" xml:id="A02" corresp="B02">
<phr>
<choice>
<reg>Taṃ kho panā</reg>
<orig>taṃ kho pana</orig>
</choice>
</phr>
</quote>
<note type="bhasya" target="#A02">
ti itthambhūtākhyānatthe . . . .
</note>
```

次に、註釈文献の被引用語句を原典と関係づけるために、@xml:id と @

correp を用いて原典をマークアップする必要がある。【図 6】は、【図 5】と対応する原典 *Vinayapiṭaka* のマークアップ例である。

図 6 原典のマークアップ 1

```
<phr xml:id="B02" corresp="A02">Taṃ kho pana</phr> bhavantāṃ gotamaṃ evaṃ . . .
```

これにより被引用語句を紐帯として原典と註釈文献とがリンクされる。しかし、このマークアップだけでは、初出の箇所のみがリンクされただけであり、apubbapadavaṇṇanā という註釈規則への対処ができていない。そこで、原典の後続箇所でも同一語句が現れたときにも当該註釈を参照できるように、@correp によって前出の引用箇所と関連付けることが必要となる。例えば、【図 6】と同じ句が原典 *Vinayapiṭaka* の後続箇所でも現れた場合、【図 7】のようにマークアップすべきである。

図 7 原典のマークアップ 2

```
<phr corresp="B02">Taṃ kho pana</phr>bhavantāṃ gotamaṃ evaṃ . . .
```

以上のマークアップにより、原典と註釈文献がリンクされ、*Vinayapiṭaka* と *Samantapāsādikā* は連結されたテキストとして可視化されることとなる。かつてこのようなテキストは、持律者と呼ばれる高僧の頭の中でのみ成立していたが、デジタル・テキストのマークアップによりそれを具現化することが可能なのである。

ただし、このマークアップは *Vinayapiṭaka* と *Samantapāsādikā* の内容を把握しながらでなければ進めることのできない難易度の高い作業であり、専門家のみが為し得るものである。また、事前に註釈文献の読みを確定しておくことが求められる。現時点では、このようなテキストの再現は時期尚早であり、まずは諸版本対照テキストと註釈対象語句索引の作成に注力すべきと思われる。

注

1 O. v. Hinüber [1996: 103 (§ 208)] を参照。

- 2 本プロジェクトを推進するために、2016年度より3年間、JSPS 科研費（若手研究 B 〈16K16693〉）を受けた。また、2019年9月からは、第48回（2019年度）三菱財団人文科学研究助成を受けている。
- 3 これまでのところ、パーリ語文献の諸版本のテキスト・ファイルに誤入力がどの程度含まれるのか調査は行われていない。今後、サンプル調査が必要であると思われる。
- 4 註釈文献および文法学書が原典の読みに影響を与えた可能性が K. R. Norman [1985] により指摘されている。註釈文献の影響は現代のアジアの三蔵版本にもうかがえ、例えば、ビルマ版三蔵の原典は、諸版本およびクトードー・バゴダの石板三蔵以外に、註釈文献、文法学書などを参照して制作されたと伝えられる（*Chattha Sangayana 2500th Buddha Jayanti Celebrations*, p. 64-65）。
- 5 以下の引用文に見られる様に、「アッタカターと共に三蔵」「アッタカターと共に律蔵」といった表現が註釈文献中に散見され、原典を註釈文献に基づき理解することが推奨されている。

Samantapāsādikā 789.32-790.9: bhikkhunovādakena pana sātthakathāni tīpi piṭakāni uggahetabbāni, asakkontena catūsu nikāyesu ekassa aṭṭhakathā paguṇā kātabbā, ekanikāyena hi sesanikāyesu pi pañhaṃ kathetuṃ sakkhissati, sattasu pakaraṇesu catuppakaraṇassa aṭṭhakathā paguṇā kātabbā, tattha laddhanayena hi sesapakaraṇesu pañhaṃ kathetuṃ sakkhissati. vinayapiṭakaṃ pana nānatthaṃ nānākāraṇaṃ, tasmā taṃ saddhiṃ aṭṭhakathāya paguṇaṃ kātabbam eva, ettāvatā hi bhikkhunovādako bahussuto nāma hotī ti.（比丘尼教誡人はアッタカターと共に三蔵を習得するべきである。できないならば、[経蔵の] 四ニカーヤのうち一つのアッタカターに精通するべきである。何故ならば、一ニカーヤによって、残りのニカーヤについても、質問に答えることができるからである。[論蔵の] 七論については、四論のアッタカターに精通するべきである。何故ならば、それら（＝四論）について見方を獲得した者は残りの論（＝三論）について質問に答えることができよう。しかし、律蔵は様々な意味を持ち、様々な因縁を持っている。従って、アッタカターと共にそれ（＝律蔵）に精通するべきである。実に、この限りにおいて、比丘尼教誡人は多聞と呼ばれる）。

このような原則は今日に至るまで上座部仏教においては不文律として存在し、これによりアッタカターが極度に重視され、ティーカー、アヌティーカー、ヨージャーナー、アヌヨージャーナーなどのアッタカターに対する註釈が多数産み出されたとされる（佐々木教悟 [1970: 78] を参照）。

使用テキスト

Samantapāsādikā. 7 vols. Ed. J. Takakusu, M. Nagai, and K. Mizuno. London: PTS, 1924-1947.

参考資料

- 佐々木教悟「インド仏教への道しるべ(5)」『仏教学セミナー』第11号, 1970, 75–86.
Chattha Sangayana 2500th Buddha Jayanti Celebrations. 1956. Rangoon: Union Buddha Sāsana Council Press.
- von Hinüber, Oskar. 1996. *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Norman, K. R. 1985. “The Influence of the Pāli Commentators and Grammarians upon the Theravādin Tradition.” *Buddhist Studies (Bukkyō kenkyū)*. 15: 109–123.
- “TEI P5: Guidelines for Electronic Text Encoding and Interchange 3.6.0.” <http://www.tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/html/index.html>, (cited 2019-08-05).